



# 編さん便り

千葉市立郷土博物館リニューアルオープン………1  
 千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!  
 第16回 関東大震災がもたらした東京湾の  
 海底の変化と貝類養殖漁業………2-3  
 出張!! 紙上☆古文書講座  
 第4回 下から返る文字②………4

Chiba-shishi News Letter NO.36 2026.3

千葉市立郷土博物館があらしくまゆかわりました。  
 CHIBA CITY FOLK MUSEUM has opened following its renewal.



本紙 33号で紹介しました、お城のかたちをした当千葉市立郷土博物館は、2025年11月に無事リニューアルを終え、開館いたしました。

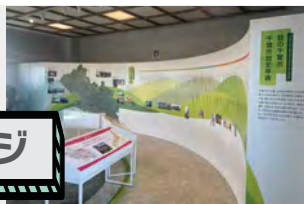
外観はいままでと変わりませんが、展示内容を通史展示とし、またテーマを「陸と海・人とモノを結ぶ『千葉』」とし、各種コンテンツにより、子どもから大人まで、多

くの方に楽しんでいただけるような内容に生まれ変わりました。

3月28日からは桜まつりが予定されています。きれいな桜を楽しみながら、歴史探訪はいかがでしょう。足をお運びいただけたら幸いです。



5F ちば一望ラウンジ



5階に設置された歴史年表で大きな流れを概観できます。外の回廊から千葉の町並みをご覧ください。富士山がみえることも!

4F 原始・古代



4階では原始・古代のチバの様子を描いた「いにしえチバウォール」がお出迎えます。最も古い「千葉」の文字がみえる木簡レプリカの展示も。

3F 中世



3階では千葉氏500年の興亡の歴史などを紹介する「千葉氏シアター」など、さまざまな展示をとおして「千葉」の礎を築いた千葉氏の全てを知ることができます。

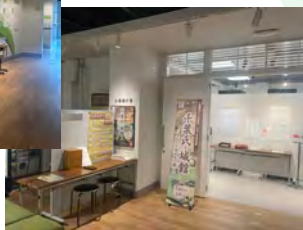
2F 近世・近現代



2階は近世・近現代の展示です。近世展示では原史料からみえる人々の生活を意識した展示をしています。また五大力船の模型や積荷のレプリカなどから陸と海を結ぶ結節点としての千葉の姿をみることができます。近現代展示では大正10年市制施行時の祝賀アーチを再現しています。

1F エントランス・企画展示室

エントランスには壁面に戦後の給食の時代ごとの変化をとおして歴史を学ぶ「歴史を楽しく学ぶ千葉介の『虎の巻』」コーナーもあります。



# 第16回 関東大震災がもたらした東京湾の海底の変化と貝類養殖漁業

千葉市史編集委員 森脇 孝広

「ちば市史編さん便り」26号(2021年3月)において、私は「千葉郡の海でノリ養殖がはじまるまで」と題して、明治期を通じて千葉郡の海面にノリ養殖漁業が定着していく様子をご紹介しました。今回は『千葉市史 史料編 近代2』に掲載した史料の内容をふまえ、大正期における貝類養殖漁業の展開と、関東大震災による貝類養殖漁業への影響についてお伝えします。

千葉郡水産組合による1913(大正2)年度の施設事業計画では、ノリ・カキなどの養殖試験を行い、その模範を示すこと、貝類の養殖においては粒の大きさの統一を図り、品質の改良と缶詰用の試験を行うことなどがうたわれています。ノリ以外にもカキ、その他の貝類養殖の事業化を図ろうとしていることがうかがえます。検見川で設立された養蛎組合の1914(大正3)年の規約では、カキ養殖で得た利益を預金し、防災器具の購入にあてることができるようにすることなどが取り決められました。また、稲毛漁業組合の1919(大正8)年度の事業報告では、農閑期かつ貝類の値段が上がる冬の時期に、共同販売を行ったり、山間地に行商へ行ったりした結果、多くの利益が得られたことが記されています。こうして、貝類養殖漁業は地域の海面に着実に根を下ろしていきま

した。

ところが、そうした状況を一変する出来事が1923(大正12)年9月1日に発生しました。関東大震災です。この震災により、東京・横浜などの都市で火災が発生し、甚大な被害が生じました。同時に、いわれなき流言飛語によって多くの朝鮮人が殺害されるといった事件にもつながりました。一方で、この震災では東京湾の地形に変化が生じ、漁業にも少なからぬ影響を与えました。その状況を、以下に詳しくみていきます。

震災翌月の10月下旬、水産講習所は、東京・神奈川・千葉の一府二県と協力し、東京湾の海洋調査を開始しました。水産講習所は、1897(明治30)年に農商務省が設立した日本初の国立の水産教育・研究機関で、現在の東京海洋大学にあたります。岡村金太郎以下調査メンバーは、22日には千葉県に入り、翌日に千葉市・千葉郡の沿岸を調査しています(写真1『東京日日新聞』1923[大正12]年10月24日)。その調査結果が『激震地方ニ於ケル海洋ト漁業 其一』にまとめられたのが、この年の12月です。

この調査報告によると、海底の変化について、東京湾北部の沿岸にあつては、東京の大森・品川等で海底の上昇があつた他は、一般に海底が低下したといひます。特に横浜から羽田に至る間、および深川から検見川に至る間は低下が顕著とのことで、船橋では1.87尋(約3.4メートル)の「水深の増加」、すなわち低下がみられたと述べています。

次に、養殖貝類の被害状況について、その最大の原因は、横須賀軍港内の重油タンクが火災から爆発を起こしたことにより流出した重油だとしています。「当日ノ風向ハ南西ノ疾風」だったため、「其大部分ノ重油ハ水面ニ重層ヲナセルマ、北流シ」、津田沼・幕張を中心に影響を及ぼ



写真1 「いよいよ開始された東京湾海洋調査」 (『東京日日新聞』1923年10月24日付)

十一時三十分ニ全部本部ニ引揚ケ汽機モ消火シ各部ハ事業止  
 ノ状態ニアリシヲ以テ取急キ汽機ヲ準備シ火災場ノ現状觀察  
 ナセリ  
 當時重油タンクノ状況ハ一號ハ一、三六〇、三三三、九九  
 六、二〇〇ノ外各タンクハ規定「マーク」ニヨリ夫々六、〇〇〇、  
 乃至七、〇〇〇ノ油ヲ充滿シアリシヲ以テ滿載セルタンク  
 ハ上部ニ約一尺ノ空隙アリキ地盤隆起スルヤ重油ヲ滿載セル  
 各重油槽ハ震動甚シク貯蔵重油揺動シテタンクノ天蓋ニ衝激  
 シ天蓋ト胴体及天蓋中央部ノ接合部ヲ所々切斷シ又地盤隆起ミ  
 テ一〇乃至三〇度傾斜ヲ起ス等多量ノ油（二〇〇〇乃至一、〇  
 〇〇〇）ノ如ク逸出シ三十六尺ノ高所ヨリ落下飛散ス又各  
 タンクノ取出管（徑十二吋）ハ殆ント切斷セラレ成ハ六吋水

海軍

0370

(イ) 震火災一般状況  
 九月一日午前十一時五十八分大震後間モナク箱崎重油タンク  
 ニ火災ヲ起セリ當日ハ土曜日ナリシヲ以テ燃料關係ノ現場ハ  
 燃料ヲ附シテ萬一ノ場合ニ備ヘタリ  
 第四 燃料 部  
 官雇傭人職工ヲ擧ケテ防火ニ従事セシメタリ水道ハ故障ヲ生  
 シ消火栓ハ用ヲナサス消火器ヲ用ユルモ茲メテ微弱ナリシヲ  
 以テ廻轉製造所ノ井戸水並ニ海水ヲ「バケツ」ニ運ヒテコレ  
 ニ灌ケリ試驗所ハ藥品燬破損シ異様ノ煙ヲ擧ケシモ直チニコ  
 レヲ消止メ且ツ危険ナル藥品燬ヲ道路上ニ取出シ投棄セリ廻  
 轉製造所ハ安全ニ消火セシメシモ尙甚タシク傾斜シ且再燃火  
 ノ恐レナキニシモアラサリシヲ以テ井戸水ヲ桶ニ汲ミ盛キ劑  
 總夫ヲ附シテ萬一ノ場合ニ備ヘタリ

海軍

0369

写真2 震災関係報告 横須賀海軍軍需部「震火災一般状況」(部分)

大正12年 公文備考 変災災害付属 卷7 (防衛省防衛研究所) \*より

したと述べています。

この重油タンクからの火災と油漏れについて、関係する史料がアジア歴史資料センターのウェブサイトで公開されています(写真2\*)。この経緯を私なりに要約すると、地震の揺れでタンク内の重油が暴れてタンクを突き破り、地盤の緩みによって傾いたタンクから重油が滝のごとく流れ、周辺は油の海と化した模様です。そして、まもなく火災が発生し、溢れ出た重油に延焼し、重油の火は風に煽られて海上に至った、とあります。

このように、海底の変化と貝類への被害をもたらした地震でしたが、今後の予想という点では、意外な見通しが述べられていました。今度の地震で「養殖場ノ海床ハ大部分多少ノ陥落ヲ生ジ」、「底質ハ堅ク締リテ浮泥ヲ掃ヒ去レリ」として、ハマグリ・バカガイ・モガイ等にあつては好適な養殖場所を拡大する結果と

なったといえます。地震によって海水が攪拌され、海底に沈んだ泥が浮き上がり、引き潮によって沖合に運び去られたためではないか、と報告は見ています。

その後、時代は下り昭和になると、都市化の進展にともなう東京湾の水質汚染と魚介類への被害が問題になります。さらに、戦争の長期化と軍需生産拡大の要請から、千葉市沿岸への日立航空機の進出があり、東京湾の漁業は三度影響を受けることになります。欧米に追いつけ、追い越せと、急速な近代化と軍事化を進めてきた近代日本。その余波は、自然相手の産業に及ぶことになるのですが、その点については、また別の機会にお話することとします。

\*「東京・横須賀・大湊方面(8)」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C08051003800、大正12年 公文備考 変災災害付属 卷7(防衛省防衛研究所)



